

911.168-0814-2



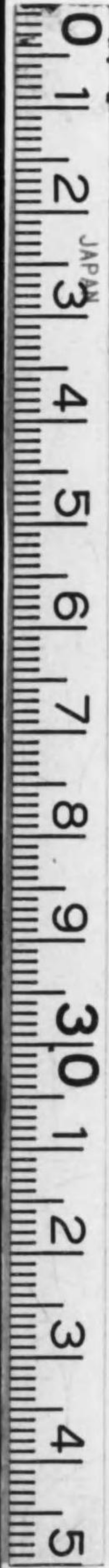
1200500755722

911.168

814

2

×  
複写



始



9H.168  
0.814  
2



太田水穂著

螺鈿

人文書院發行



910  
244

1

螺 鈿 目 次

昭和八年	
二田莊冬意	三
亡ぶるもの	五
藍染川	七
鵝沼	九
蓮の荷	一〇
風露行	一二
昭和九年	

梅……………一五

さくら……………一六

歸り路……………二一

東郷元帥薨去……………二四

菖蒲園……………二七

鎌倉……………三〇

杏々山莊……………三三

山莊の秋……………三五

秋搖落……………三九

西國の旅……………四二

薩摩大隅……………四六

大原寂光院……………五一

大原三千院……………五五

昭和十年

池邊鶴……………六二

瑞若星……………六四

二重橋稽拜……………六五

早春……………六六

氷魚……………六八

江戸川にて……………七一

五月風……………七三  
 銀茅花……………七四  
 花有情……………七四  
 夏ごころ……………七六  
 秋の癖……………七六  
 海の光……………七六  
 曉の鐘……………七六  
 椿山……………七九  
 海上雲遠……………一〇一

昭和十一年

圓覺寺大會……………一〇九  
 晨雪……………一一〇  
 雪……………一一三  
 山莊春雪……………一一七  
 早春海……………一二〇  
 梅……………一二三  
 花二十日……………一二七  
 義朝墓……………一三九  
 季節……………一三三  
 美濃養老……………一三五

佐久耶姫 ..... 一三八  
 杜國の舊跡 ..... 一四三  
 芍薬 ..... 一四三  
 葛飾 ..... 一四六  
 かきつばた ..... 一四九  
 蓮 ..... 一五三  
 秋精進 ..... 一五五  
 秋よ人ならば ..... 一五九  
 豊年頌 ..... 一六三  
 天照る雪 ..... 一六四

藪もみち ..... 一七〇  
 山路菊 ..... 一七一  
 小雪 ..... 一七三  
 昭和十二年  
 土 ..... 一七七  
 芽 ..... 一八〇  
 十國峠 ..... 一八三  
 早春賦 ..... 一八六  
 蘭を掘る ..... 一八八  
 曙 ..... 一九二

餘寒……………一五五

紅梅……………一九八

松竹撮影所……………二〇一

冷泉爲相墓……………二〇四

青松の葉……………二〇六

牡丹……………二一〇

五月雨……………二二二

北の旅……………二二六

早天……………二二八

たたかひ……………二三〇

昭和十三年

戦機……………二三三

火燄……………二三五

神苑朝……………三三九

大いなる日……………三三三

海邊にて……………三三五

松・櫻……………三四一

立春……………三四四

梅・椎・竹……………三四六

春嵐……………三五〇

黒き顔……………二五三  
 奥室生寺……………二五五  
 御影山莊……………二五九  
 明石大藏谷……………二六三  
 光悦寺……………二六四  
 近江……………二六八  
 大和處々……………二七一  
 征途……………二七四  
 みじか夜……………二七六  
 精靈祭……………二七九

蟲諸相……………二八三  
 煙草……………二八六  
 笛の音……………二八八  
 落葉……………二九一  
 鎌倉瑞泉寺……………二九三  
 昭和十四年  
 社頭除夜……………三〇一  
 護良親王の御墓に詣でて……………三〇五  
 岡本かの子君を悼みて……………三一二  
 病後……………三二六



朝の歌……………三二八

五月閣……………三三一

夏廂……………三三三

近江……………三三六

日吉神社……………三三八

法の御山延暦寺……………三三〇

横川にて……………三三三

秋雲……………三三三

梨子……………三三五

鐘の音……………三三六

遠江……………三三九

つぐみ……………三四二

美濃明白寺……………三四七

**昭和十五年**

神武紀……………三五二

紀元二千六百年……………三四四

迎年祈世……………三五六

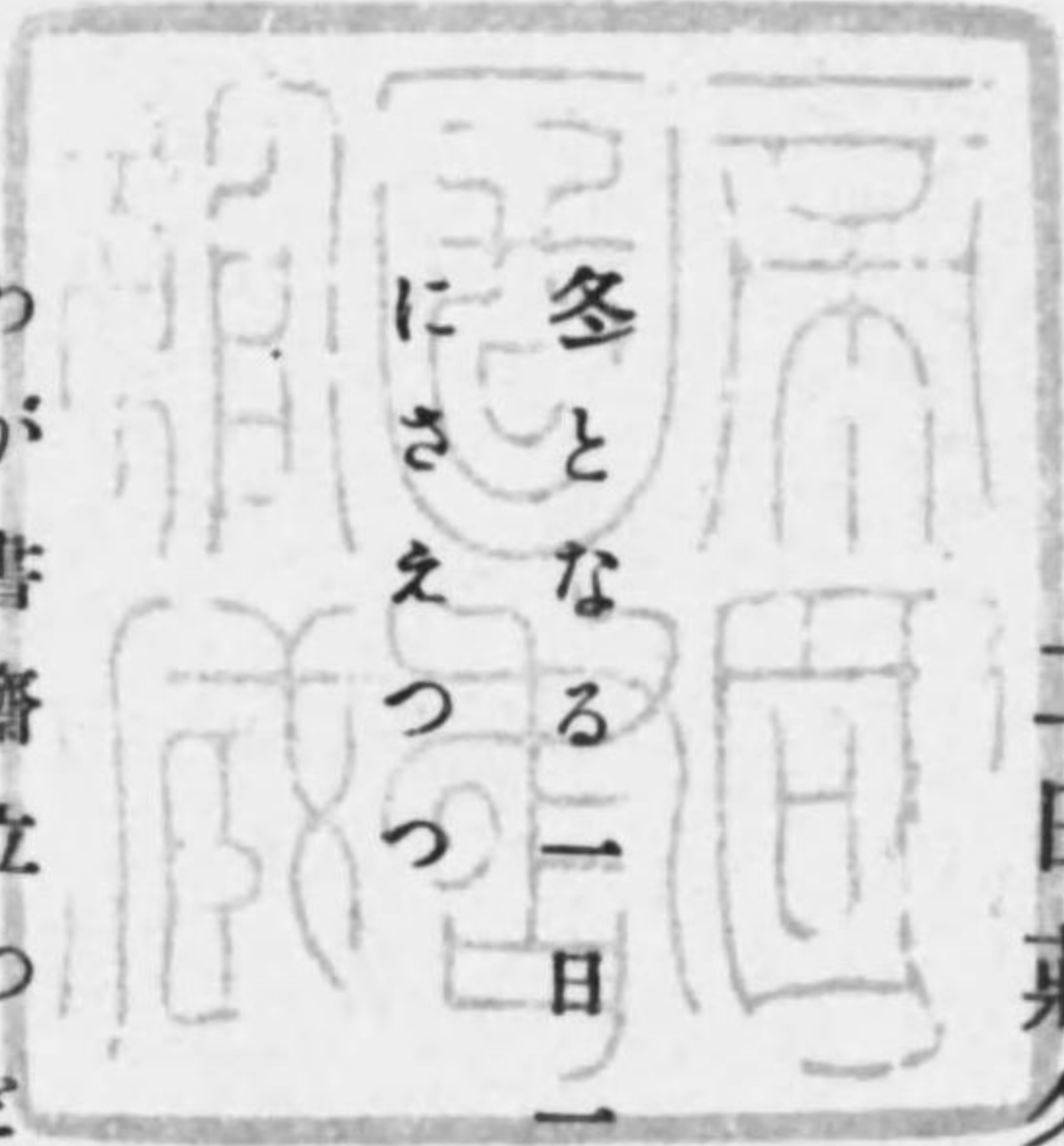
冬山遊……………三五七

冬籠居……………三五九

根芹……………三六二

昭和八年

二田莊冬意



冬となる一日一日に艶まざる柚子の玉實や霜  
にさえつつ

わが書齋立つと坐るとまかがよふ柚子の玉實  
のみえて明るき

冬いよよ柚子の玉實の照るなべに襖の藍の地  
紙さえくる

霜しづくしなたる枝に柚子の實の玉照るみれ  
ばおもはゆきかも

葉ごもりにかくれてありし柚子のみ實一つす  
るごく色をなげくる

亡ぶるもの

盛んなるものの亡びのすさまじき姿をみよと  
芭蕉立ちたる

すたすたにい裂けに裂けて大芭蕉亡ぶるもの  
の痛ましさをみす

霜三たびさすがにけさは執念しつねんのかくの葉なが  
らもろくこぼるる

山吹の霜葉ぞろりとこぼれたる時をりからや  
あさ日さしきぬ

いかばかり味氣あじなからむ春咲きて亡ぶる冬の  
なからましかば

### 藍染川

芹つみし畦あぜはいづくぞ古への藍染川は町の家  
ごめに

川にそひて薨あくみたる軒並のきの神明町はひるも  
三味ひく

楓ふたもと秋は落葉の小流に大根をあらふ娘  
もいまはるぬ

あさ霜に打ちはすみある槌の音この町にして  
鍛治も老いにき

もろ手もて子をかばひつつ焼け死にし慈母觀  
音は灰の中より 函館大火

鵲 沼

暮れはててしばらくなごむ松の戸にぞんごと  
潮の音あびせくる

この宿は松の林の奥なれば湯殿のなかも松葉  
ちりこむ

菴の荷

玄關におくられてこし菴の荷を何かとおもへば火鉢なりける

下つ毛の益子の山の白埴の火をとほしたる肌  
の光はも

火鉢二つ炭をあかあかと入れられてすでに落  
着くたたみのうへに

昭和八年十二月二十三日黎明皇太子御誕  
生あらせらる

御日嗣の皇子生れまじし悦びをつたへて太し  
けさのサイレン

風露行

昭和九年一月潮音同人松木静泉逝く。

雪よふれ虚空微塵に天がける鷺のしら羽のま  
ぼろしの旅

紅蓮捲く音のとろきに燃えはててたましひ  
一つ宙を澄みゆく

昭和九年



梅

こがらしの吹ききよめたる朝空にはじけて梅  
の花しろく咲く

月すでに白<sup>しろ</sup>みつくして砂をゆく水あさあさと  
しら梅の花

さくら

朝空のみどりに觸るるひとところさくらに風のありとしらるる

春やけふきららに光りかすむ日の空より花のこぼれつつくる

まなく散るさくらの花をこき入れて春の日永ながのやまぶきの花

風ひととき流るるなしてちる花の光りに向ふ眼めはおぼろなり

ゆくりなく枝を離れてちる花のそのひとひらのゆく方かたもみむ

しめやかにさも思ひなくちる花のもろさもう  
れしけふのころに

野がすみに繩手のさくら盛りあがりうねりな  
がながと雲にまぎるる 江戸川

野がすみにこもりてありし花の雲日たくるま  
まに光り細かなり

綱つけて發動船に曳かれゆく團平船はみな糞  
のふね

河こえて田圃の道のおのづからのぼりとなれ  
ば國府臺なり

憂々と騎馬兵隊の入りきたる里見公園のひる  
の松風

騎馬兵の帽子にふれてひと枝のさくらゆつさり散りこぼれたり

晝ふかく松のあらしの音ぞ澄む谷あひにして  
さくら静けき

ひるたけて松風の音の澄むなべにさくらの花  
の光りたちくる

歸り路

暮れおそき日の入相の夕がすみ鐘鳴る方を立ちて眺むる

草臥れて石につまづく爪先のいたさもうれし  
花見がへりに

真間すぎて葛飾田圃一望の夕がすみなり花も  
こめつつ

遠き灯に帝釋天の灯さす人のを指のダイヤ光  
れる

野がへりのあまくかなしき草臥にしみ入る風  
呂の熱さむさぼる

谷八谷さくらの雲にひゞき入る鐘しづかなり  
明六つの山 歌會二首

明けゆくや花になづさふ霧晴れて遠谷川の瀬  
音たちくる

風四月都の花にふきつくるほこりのなかに友  
と別るる 送別

## 東郷元帥薨去

大東郷薨去とかきし號外を手握りにつつしまし動かす

興廢の危機にし立ちて微塵だにゆるがぬ岩の意志をもてりき

神さぶる位のみかは八十あまり年さへきみは天足らしたり

國葬をたまふとのりし大御言この臣によりていよよ重みあり

富士が嶺はとほにしあらむ偉き人わが東郷はつひにかへらす

丸之内日比谷が原へ葬りの列ながながと泣き  
つついゆく

日のみかげ天のみかげと國こぞりあふぎし人  
はかくろひはてぬ

大きみのみ名を汚さぬ世に一のきよく氣高く  
殿しかりし臣

菖蒲園

放水路の水のひかりを横たへて堀切村は田ご  
ころのむら

田のみづにうつる紫白あやめ夏バラソルのつ  
らなりてゆく

むらさきに絞<sup>しぼ</sup>り白<sup>しろ</sup>たへおのもおのも色をつく  
してさくがかなしき

ふた株の老松ありてこの園のむらさきあやめ  
色ことに澄む 小高園

鷺に似てひと花すいと水をぬく青<sup>あお</sup>蘭<sup>らん</sup>のなかの  
おもだかの花

みちのくの浅香のかつみ掘りうゑし葛<sup>かつ</sup>飾<sup>し</sup>人<sup>びと</sup>の  
跡はまぎれず

秋田青雨病を天橋立に養ふ

橋立や天の中道とほけれど夜<sup>よ</sup>ひるとなくゆく  
こころかも



## 鎌倉

昭和九年五月鎌倉扇ヶ谷にさよやかなる山莊を營み時々静養す

亀が谷いりあひの鐘をつく寺はいづくにかあ  
らむ雲ゐごもりに

西晴れて夕日にむかふ一尾根のもとあら立の  
松のはるけさ

山黒く暮れて涼しく灯を入るる谷なな隈の木  
がくれの家

暮れ行けば七百年の木の闇にも奥ふかくふ  
くろふの鳴く

うす墨の源氏山よりみんなみへ夜海の沖へ銀  
河ながるゝ

## 杳々山莊

鎌倉やそこはかとなき木の闇もなつは匂はし  
星明りして

宵やみの人のほしゐにほのとさすふみ月白き  
天の川かも

ふたならび寄りあふ山の間よりみえて小さし  
ひとひらの海

梅雨<sup>つ</sup>すぎで風南<sup>う</sup>ふく七月の海のかがみは今日  
も晴れなり

晴れくもり時ぞともなく色かはるうみをここ  
ろにおきてわが住む

ふみよまむたつきをすらも忘れけむきのふも  
けふもただ眠りつつ

そがひ山ゆふべとなればきてこもる雲るひそ  
けし笹しづくして

すがひゆく夜霧のなかにしばだたく睫毛もす  
すし灯さへ濡れつつ

### 山莊の秋

保土ヶ谷をこえて南へゆく汽車の音のどろ  
きに身をゆだねをり

石階にしづるる露の萩のみやはつかに門のし  
るべなるべき



萩のえだ石にしづれて石すこし濡れてしあり  
ぬかかることすら

起きおきのあさのわが眼にうす紅の濡れにぞ  
濡れておもげなる萩

手をうてば杵<sup>きね</sup>けき方に山彦のこたふる聲をよ  
すがにし住む

秋やわきてひるはことさら山彦の音さへ澄み  
て胸あくがるる

くちびるにつきたる墨をあさあさの涼しさに  
して夏書<sup>なつがき</sup>ならへる

もてなしの何はなけれど啼く蟬のしぐれの雨  
にぬれてゆきませ

山莊歌會

谷は秋の風ひと押しの草の戸にうごく色ある  
うす紅の蓼

瓜茄子の畠をつくりて山住みのともしきなが  
ら日々に事足る

竹地龍三氏の草月流生花に寄す

投入れし草ひともとの葉にだにも空ゆく月の  
そふこちする

### 秋 揺 落

常磐木にまじるひとと大槻の五百い枝ほのもみ  
ち照りぞかがよふ

冬くれば荆おでら蕨あがもとの笹の葉のかする風も  
かたくなりきぬ

山莊の四方の山よりふきたぎつ松のあらしの  
なかに起き臥す

松風の音は簷端にありとおもへされども眼に  
はみることもなし

ひとすくひ木の葉を空にふきあげてしばしは  
風をあそぶさまなる

わが山や冬は落葉の谷こえて日和の海の波も  
みるべく

揺落の秋の野山のもみぢ葉にあくがれいでて  
遂にかへらぬ 悼大川彦一郎

かかげまつる釋迦の眉間に暮れ方のもみぢの  
光しばしいざよふ 悼安田式部

## 西國の旅

豊後竹田及び阿蘇を過ぐ

水青く谷にながれるてひとかたまり夕日にひ  
くき白壁の町

こゝにして竹田<sup>ちくでん</sup>ゑがく山水のうるほふ色をお  
もふしたしさ

鶴すでに住ますしなりて百年<sup>ひゃくねん</sup>のむなしき谷に  
水流れたり

のぼりゆく高原の秋の夕晴にさやけく白く阿  
蘇の山みゆ

青空のいろにも染ます天わたる月にも濡れず  
荒らけき山

月一つ空を照して高原は霜けの霧のひかりな  
がれたり

ひたもえにもえにぞもえて阿蘇の山ひと木を  
だにも生ひしめぬかな

西の方日の夕焼のすす色にあせ果てぬれば阿  
蘇もみえぬも

耶馬溪

秋の日の耶馬三十里もみち葉に自動車をとめ  
てみるひまもなき

別府

血の池の地獄のうへにひつたりとかぶさりて  
秋のさやけき青空



## 薩摩大隅

野間が關こえて南へ照る國の秋はゆたかなり  
潮のいろさへ

荒崎の阿久根の濱に鶴すでに來しときくにも  
こころいそがる

西ひがし生きてふたたび會ひえしとかたみに  
笑みて黒き顔なり 安田尙義

みんなみの佐多の岬に世を憂けくこもりてあ  
りし友も走せきぬ 磯長武雄

西海の波にながれてきにし日のあはれをおも  
へ亡ぶるもよき 久木田灯兒

高隈の鹿の屋の谷にうぐひすのささなきなが  
ら聲はまぎれず 久木田いく子

吾平山陵は鶴茅葺不合尊の御陵なり

萱の葉もふきあへぬまに生れまししみ子の御  
陵を見まくわが來し

わたつみの龍王媛のくろ髪かなづさふなして  
蒼く流れたり 豊玉媛二首

髪ながく雲をいでくる天人の眉の蒼さにひき  
はへし水

古江港を俯瞰して

眼の下に入海の曇りほの白く山すでに暮れて  
日を落したり

開開かいかいの峰に夕日のひかりさし入梅の波暗くい  
ざよふ

大原寂光院

稻を刈り稻を束たばねて大原やむかしも人はかく  
て住みけむ

日を入れてことなき様にくれてゆくきのふも  
山はかくてありけむ

日を入れて山ひとときに茜さす夕べの秋のむ  
らさきの松

尼そぎのむすびし玉のおん手さへおもほゆる  
かもおぼろの清水

胸裂くるなげきをもちて見る山の青さは墓の  
おもひなりけむ

岩かげに今もわき出<sup>で</sup>てささやかにまぎれぬ水  
のいのちかなしき

ひややかにかすかに谷のこぼれ日のもみちに  
ひびくせせらぎの音

門院も阿波の内侍も召しましし茸<sup>くさびら</sup>ならむ匂ひ  
かすかに 齋食饗應

同行足助次郎に示す

大原の寂光院の秋よりも人のあはれにしむ日  
なるかな

同じく草野つゆ子に示す

このさとに一目ひとめのあひのえにしだに忘れゆく  
らむ忘るるもよき

### 大原三千院

谷あひみち稻田の霧に星みゆる夕べとなりぬ  
大原の里

一念に三千の生なまもゆくといふ高くはげしき教をしへ  
をぞおもふ

暮れて田の夜霧のうへに山いくつ黒く大きく  
動きいでたる

三千院杉こがくれの堂の扉まにゆふべのひかり  
しばしいざよふ

みささぎのしら洲の濱に荒海の沖のなごろの  
音もきくべく 後鳥羽天皇御陵

この五日眠りつくしてなほのこる旅くたびれ  
は底なきごとし 旅より歸りて

旅二十日くたびれ果てし眼にうつる遠山川は  
まぼろしに似る

菊たべて吾も千歳ちとせの山人の死なぬ老いせぬ春  
に逢はまし 鳥貫芳野に

冬山のからびし岩にあさ月のにほひをひきし  
鑿のさえかも 平野俊佐久「残月」銘硯を贈り來る

する墨のすすりの雲にあさ月の銀のかすれを  
おきて思はむ

梅もどきつばらに霜にはじけたり眞ごころふ  
かき冬をしる日や 贊川他石氏に

昭和十年

池邊鶴

大ぎみのみ濠の水にあかつきの空よりきたる  
鶴もあれかし

群れくだる天のしら羽の鶴よりも光りこまか  
なり水にふる雪



首のべて鶴もみるらむ水かゞみ明けての今朝  
の春のおもひに

さゞ浪のひかりゆららに音一つきこえぬ晝の  
鶴の物思ひ

みぎにはは鶴あし長くあゆみゐて泥に照る日  
の春めきてきぬ

青柳のみごりの枝も萌黄づく春の日ながの丹  
頂の鶴

うきてきゆる雲の無心をうらやむか金網のな  
かの番ひ羽の鶴

ひむがしの天の國原にあし田鶴のゆたけく舞  
ひてゐし日おもほゆ

## 瑞若星

生れましし天照るみ子の御よはひ明けての今  
朝は三つに成りたまふ 元旦

大ぎみの玉のおましに日のみ子のたちたち歩  
むみ脚をがまむ

橋二重七重ななへによるふ城がきの奥ものふかし大  
み屋根みゆ 二重橋稽拜

わが大ぎみ晴れのみ幸の御鹵簿おんろぼのひかりをわ  
たすひんがしの橋

二重橋廣場の砂にひれふして天くだりくるみ  
かけ拜をらがむ

早  
春

啼きのぼる雲雀もあれな野は麥の青はだらな  
り浅く霞みて

汽車の音そがひの峰にひびききて遠ざかりゆ  
くは遙けき思ひす

暮しばし雲よりもるる日の脚の太くななめな  
り海原のうへに

灰となる人のけぶりもまじるらむ晴れて三原  
の山白くみゆ

寂けさの奥のこころのいかばかりゆたけくや  
あらむ遊ぶがにみゆ 茶事

## 氷魚

信濃の立岩欣子雪に漬けたるを箱にして  
贈りきたる

釘うちて荒繩かけし荷づくりの白木の箱よすが  
がしくありにし

こじあくる箱の手もとにいち早くこぼれて氷  
魚の目もいきいきと

岩そぐ垂水の桶にひたしあるゆで菜の青に  
あられふりきぬ

鎌倉や松のあらしもふきかはる春の山居やまゐりに酒  
あたたためむ

門前のさくらの闇に自動車を降りる女の白き  
足袋みゆ

山こえて野こえて春もきにしぞと朝戸を明く  
 片里の母かたがはのぼ 立岩欣子に

あさがすみひと日ひと日に乳の香の色こく染  
 まる野山なるらむ

猫やなぎ背せのわが子にひと枝を手たぐさに折り  
 て芹も摘むらむ

## 江戸川にて

水をふく南風みなかぜつよし花見船みよしをつらねき  
 ほひつつつゆく

川こえて暇手のみちにかへりみるさくらの雲  
 のいろ汚きたれたり

## 五月風

花すぎて若葉にかはるこのごろのゆふへの空  
の 高き晴れかな

みえそむる星よ稚わかなし梢ややみづ若葉さす木  
立のうへに

物どなき匂ひをふきてそよぎくる五月の風を  
こひといはまし

野は麥の青ひといろに暮れてゆく夕闇あまし  
風そよそよと

耳にきて離れぬもののごとくにもそばえてふ  
けば風も情あり

## 銀茅花

椎山の椎の若葉に立つ雲のかがよふ光りすで  
に夏なり

玉藻よる五月の海をまろびきて茅花の銀に風  
のながるる



桐のはな麥の穂立にあさ雲の雨ともならぬ日  
のつづくころ

夜明け方赤子の聲に似てさけぶ鳥は何ならむ  
若葉の山に

白つつじ一つさやかにものの音のながれいで  
たる青芝の庭 ビヤノ

このあたり赤瓦ふく家作りの門並薔薇の垣を  
つくれる

卯の花の垣の小みちに頼朝の月毛の駒の額み  
えくる

若みどり五月五日の晴天にひびくさやけき矢  
ぐるまの音

麥の穂に五月端午の矢ぐるまも旗さしものも  
かくろひてみゆ

ひむがしの玉の宮居に皇子います五月五日の  
むさし野の晴

若葉ふくあらしのなかに銀の眼の鯉のうろこ  
のながれ流るる



風一つそらにうなりて國原は麥のあらしの光  
りしごろに

風の尾のきらり揺らげば大空の青きひかりは  
滴るごとし

ふきつよまる野の南風なんふうにりうりうと體たをしご  
きて風あがりゆく

風幾つあがりそろひてこの國のなつうら若し  
麥のみどりも

麥の穂にからまりてふる半日の雨こまかなり  
雲雀しば鳴く

鉢にうゑてひと花高き大りんの牡丹のうへの  
飛行機の音

平野俊佐久を悼む

しらぬ火のつくしの國にこのみちの柱とたの  
む人を死なせたり

岩うちてくだくる波の清けさにたぐへて人の  
命をぞおもふ

眠りつつそのままにして逝きにける魂にはさ  
はるものもなからん

寂滅の光りを抱きてくづれゆくいのちの岸の  
波音きこゆ

玖磨川の砂子にしづく秋の夜の月より人はす  
がしかりけり

大井廣の母の死去を悼みて

叱られて麥のゆふ日に泣きてゐしむかしのこ  
とも思ひいづらむ

をさなくてともに茅花もつみけらし今こそ泣  
かめこのよき母を

くみかはす夕餉の卓たのさかづきもけふより後  
は母なしにして

鳴きのぼる空にひとつの雲雀さへをしへと  
なして子をはげましぬ

あゆみゐてふいと垣根に金雀枝の花をみるに  
も泣かるるものを 水谷一楓に

## 花有情

土ふるふ大きな怖れもしらぬらし露すずしげの  
とこなつの花

鳳仙花てのひらほごの庭ながら清げに住みて  
女老いゆく

秋すでに七夕すぎてさく花の露にし慣るる情じやう  
あはれなり

さだすぎてなほ執念しつねんの色ふかき秋の桔梗は誰  
やらに似る

むらさきか紅べにかしぼりかあさ顔の蒼はあすも  
しらでさくらむ

## 夏ごころ

ささで寝る縁の外面の月あかりしらじらとし  
て遠き波音

小松山とところどころに黄の花の草がすみして  
やがて明けゆく

霧ごもりいづるあさ日の黄にもゆるけふのあ  
つさのおもひやらるる

草の穂に海のひたひの尺ばかりはつかにみえ  
てあさの風ふく

いづる日にむらさきふかく匂ひたつ玉ともお  
もふ繁松の山

## 秋の癖

楚々ときておどろかながに葛の葉の秋をみせ  
 ゆくおもしろの風

ももくさのなかにひともと大蓼のゆつたりと  
 して風にふかるる

ふけば又秋の癖とて風すらもおもひの外のス  
 さましさみす

ゑみこぼるるやがての秋のなきげにも日にけ  
 に青き栗のいがかも

玉を磨るものひびきの如くにもゆふ日のな  
 かのかなかなの聲

せみ一つ矢のごとくきて眼の前の桐の木肌に  
すきすきと啼く

日でり雨ふた山かけて走りゆく素<sup>す</sup>迅<sup>はや</sup>くしろき  
脚をみにけり

山ひと山ながれいづるとおもはるる雨ぬれぬ  
れのひぐらしの聲

ともにみし夕日の山のねぶの花ちりての後<sup>のち</sup>は  
くる人もなし

戸を明けてけさのわが眼にこぼれ入る萩おし  
なみの露のこまかさ

日にいくたびおりたち歩む庭なればひと葉の  
花のありかをも知る

## 海の光

いち早く銀のすゝきの穂どころにながれて雲  
の秋たかき空

山わかれちりゆくみれば雲だにもきのふの夏  
は忘れたるらし

秋となる海のひかりをふきためて澄む日の谷  
の松かせの音

雑木山谷あひにしてほそぼそと折しもかげる  
秋のうみみゆ

秋かせの海にむかひてなだれ入る山ふた並び  
かたむく亂松



草もみち谷は夕日に十ばかり小家をおきて秋  
あたたかや

谷は秋のひかりくまなく澄み入りて落つる一  
葉のきはもまざれぬ

をりしもぞ枝をはなれて零れたる一葉なれど  
も光りさやけき

鎌倉や由井ひと浦の日和波なな谷の秋の鐘を  
かすます

病ひいえて走せ向ひこむあし音のどろにひ  
びく鎌倉の山 南照男に

二十年秋にこころをつくしきてけふ草の實の  
とぶさまをみき 所懐

曉の鐘

ものふかくさもたえだえに鳴りいづるほのあ  
け六つのとほき鐘の音

ふかき夜のひとの寝ざめを驚かすここ世のき  
しのあかつきの鐘

いかばかり深き思ひに撞くならむあはれにし  
みて涙せめらる

鐘の音のなごりほのかに消えゆくと思ふ方よ  
り光りさしきぬ

ふかき夜のあかつき方の山の端にひかりも暗  
くいでし月かな

虧けにかけてはつかにけさの山の端に有明と  
なる月あはれなり

おもひつくし恨みつくして長き夜のあかつき  
暗くいでてゐし月

死出の山雨も落葉も繁しげからむくもる眼がねを  
ぬぐひつつゆけ 悼安田千代子

## 椿 山

冬柏山房主人内山英保氏に詠みて贈る

ここにしていけふみるきみはくれなるの玉椿よ  
り目出たかるきみ

み雪ふる越の山人ここにしてい椿ひと山を城と  
しいます

つばき山青の椿のひと葉ごどこもる千歳もき  
みがまにまに

扇ヶ谷かなめ山より末ひろにひろがる果てに  
きみが山みゆ

呼ばばそらに君がさやけきこゑさへやきこゆ  
るごとし秋晴るる日は

やがてさく春をばみよと山ひと山つばきの玉  
の肥ゆるこのごろ

顔あらふあさの井水にひたす手のぬくみもし  
たし冬となりけり 立冬二首

あさ霜の寒さをいひてなほしばし睦む小床の  
冬となりにし

## 海上雲遠

あさ鳥の海わたりゆく聲ぞする沖の夜雲もう  
ごきいづらし

いづる日のひむがし方の沖合にかたまる雲を  
洲かとおもひし

雲はみな沖におりゐていづる日の天の退邊ぞ  
にほひわたれる

天のはらいでしばかりの日を乗せて豊旗雲の  
光りながれたり

あかつきの青よこ雲をゆりいでし海の太陽し  
ましうごかず

費川他石君伊豆に遊く

ふる池の底の藻くづもかき分けてきみが拾ひ  
し玉をしぞおもふ

或るをとめの結婚に

紅梅のこぞめの花の色ふかきたもどにつつむ  
春よ長かれ

社中の某におくれる

二十年かけてきにける誓ひさへほとほと空し  
危ふからむとす

昭和十一年

圓覺寺大會

潮音社第四回大會なり。集まるもの百八十名の  
なかに折井守次河村濤人兩君光彩を放つ

生きて世にかくめでたかるものもみし<sup>ハッ</sup>への  
顔<sup>ナミ</sup>濤人のひげ

梅さけば柳笑ひていく春のいくめでたさの限  
りしられず

みちのくの友とぞ云ひし歌のこと泣きにぞ泣  
きて訴へにける

脚高くふみて阿久根の荒崎の鶴すくと立つ石  
階の霜

たゞひと目みしばかりにて別れけり戀とはい  
はじ戀よりもいや 鳥越よし子

晨雪

ひきかつぎ夜着あたゝかく寝しあさの驚くば  
かりつもりたる雪

荒山の冬木の谷にみだれ入る雪を素黒きもの  
とみてゐし



くづれくる光りをみれば天とざす雲はみなが  
ら雪にぞあるらし

黒々と雲のなかよりふりくだる雪にはあれど  
白くつもりぬ

雪つもる木立の闇のかなたより曉はやく乳子  
の泣くこゑ

きのふきて今日はた霜に別れゆく旅人かなし  
冬浅黄晴

ふりそめて門の笹穂に雪すこしからまるほど  
の初々しさを 雪二首

真椿の紅ににじみてふる雪のあさくてふかき  
契り忘るな

## 雪

此のあさの起端おきはのかほにしろたへの明るさま  
ぶしいちめんめんの雪

櫓うくぬぎぬぎ小木こぎのしもともおしなめてわが山ひ  
とつ雪にもりあがる

鳥一羽とびしとおもへ谷岨たにすの笹の葉うれの雪  
ちりしとき

岩の根に何の芽ならむ雪すこしにじむとほど  
の土のしめりに

雪すでにとくるにやあらむ岩の根の青生あをぶの苔  
の色たちてみゆ

雪晴の山をかたへに入り海の色いやふかくひ  
るたけてゆく

雪山なみ尾根のかさなり遠じろくくもりのな  
かに天ぎらひみゆ

追濱おちばまよりつぎつぎいでくる飛行機の音ごうご  
うと雪晴の山

うごきくる春はちまたの柳より脚あしなみかろき  
子の睡より

氷とけてけさ南よりふく風のひたりひたりと  
外濠の波

三冬みふゆつき春くる方かたの枝よりぞほころびそめし  
一りんの梅 北島喜好初兒

照れば照りくもれば曇る三月さんぐわつの、こころ氣球に  
似てわりなけれ 早春三首

雑木山あさややたけていづる日のひかりをふ  
くむ枝々の雪

ひとしきり青空ながらふる霞焚火のほのほ音  
立て、燃ゆ

### 山莊春雪

山かげにはつかに住みてある家をうつだかく  
して雪ぞつもれる

雪山のひかりを入れてさゝやけく動く塵さへ  
みゆとおもふ家

年こゝに身にふりつもるしら雪の光りのなか  
に目をしばだゝく

雪とくる井の邊の草の濡れ色にはつかにうご  
きくる春をしる

いさらゐの汀の草をきはだててうるむ色ある  
このあさの雪

雪とくる音をひそめて空の色の浅黄あたゝか  
し日の照る小家

追はれた大鬼はいつくにゆきけらし野山をう  
めしこの大雪に 節分

一天のくまなき晴にあらはれくる大雪まぶれ  
素ばらしき富士

## 早春海

ひとひらの光りとなりて海いまや來寄る波さ  
へつばらつばらに

磯山の松の木の間 にかげの流るゝなして  
波こまかなる

片家かたや並なみところどころに雪ありて松風の音ふき  
てゐにけり

物かきゐてふいとまばゆく顔にくるある日の  
冬の海の光り波

ひとひらの光りとなりてひつたりと窓のガラ  
スに張りつく海原

早春のけさの朝けの青空に息づきてゐるか山の端の雪

冬枯の野の片隅にかぎろひの夕光ゆづりしばし富士  
くれてゆく

手をうてば海と山とのふた方よりおゝと應こたふ  
る聲ぞきこゆる 歌集海彦山彦

梅

七たびの雪をしのぎて咲きいづるひと花なれ  
ご春たのもしき

ただ一りん咲きしばかりにこの朝のこころひ  
とへに梅にかたむく

むらぎえて落葉の谷に雪すこしあるだにうれ  
し梅さきにけり

うれしさに啼くとはすれど鶯のまだほろるな  
るけさのひと聲

山莊の障子の外きに松かせの音ある日なり梅も  
さきつつ

峰をゆく松のあらしの音さへやゆたかにひび  
け濡るるおもひに

手に撫づる髪にもしめりあるごとし春となり  
たるこのあさの風

ごとききて雨戸をあふつ風をきけ春いちどき  
にいたりけるらし



いち早く野火の煙のなびくにも花待つこゝろ  
急がるゝかな

このきみにけふたてまつる酒杯さかづきのかずかずう  
れし古稀のさかづき 中原駒山翁古稀二首

久方の天の青雲にしら雪のたてがみなびく伊奈駒が  
岳

花二十日

むさし野を面かげにして花二十日かすみにか  
もる街まち大いなり

しらじらとさくらをこめて暮れてゆく夕山が  
すみうす墨の松

蓮枯れてさくらのうへに堵かすむあさ曇りな  
り忍ばすの池

風なきにおのれこぼれてひと流れちるにも花  
のうつくしさみす

獅子吼ゆるこゑを聞かばや夕雲の光りに白く  
さくら動かぬ 上野

義朝墓 知多

義朝の首のゆくへは知る人もなしときくにも  
あはれなる墓

横川よこがわよりあふみにのがれ青墓の美濃尾張路を  
闇にこえゆく

落ちのびて柴積舟に身をかくし杭瀬川より海  
にうかべる

柴つみし船の底より這ひいでし冬日の海の落  
人のかほ

浴室の濛氣のなかに亂髪の血相かへし左馬頭  
みゆ

梅つばきすでに春なる半島は雪げの田井に芹  
もつむべく

板つきに張りつけられて身動きもならぬ庄司  
を人あはれます

萩のやの萩のしづくの眞玉なす流れの末を守  
れとぞ思ふ 金子薫園氏に

## 季節

庭ざくら土にこぼれぬてうすうすとけさ又ふ  
れる雪かとおもへる

あふられて嵐のなかにくづれたつひととき花  
に手を添へてまし

向岡の高きところより流れくる風に光りあり  
ちるさくら花

わが庭の青芝のうへにちりたまるさくらの花は  
だれ目につくほごに

庭芝に何の鳥ならむついときてさくら花びら  
を嘴くちばしにくはへし

野の宮の杉にひと刷毛ハケながれたる雲より蒼し  
あさのさくらは

野の宮のさくらの老木花すぎて麥の光りに風  
ある日なり

美濃養老

みのの國不破の山奥に古へのみかごもめでし  
みくすりの水

みくすりの泉の水の湧きいづるこの山にして  
さくら肥えたり

谷をくだる春の雪消の水音もうるほふ夜なり  
酒の香のして

瀧をみてわれらくだりくる谷岨の冬木のなか  
のせせらぎの音

この谷の砂にせせらぎゆく水の音さゝるざゝるし  
さくらの梢

くろぐろと伊吹山よりかぶさりくる夜雲のさ  
やぎ雪とつもりをり

武蔵平林寺は業平の古跡なりとか

若草の妻とかくれし狩ぎぬのたもとの色にす  
みれ花さく

## 佐久耶姫

水に似て明け放れゆくあき空の青よこ雲にさ  
くらふれゐる

明けはててひととき風にそよぎあふさくらの  
なかの佐久耶比賣神

しろじろと花を盛りあげて庭ざくらおのが光  
りに暗く曇りをり

枝々の花のかゞよひ照りあひて匂ふひかりの  
奥底もなき

雑木山うす銀色に若芽ふきさくら曇りのつづ  
くこのごろ

岬山ひとむらさくらさきてよりうしほ曇りと  
なる風のくせ

このゆふべうゑしばかりの松の葉に薄雪なし  
てさくらちりかかる

孟宗のやぶに櫻のひと流れちりちり春も暮れ  
方の山

稻莖の去年のふる根にしみてふる雨こまかな  
りさくら花ちる

泥にゐて啼くはみみすかうたたねのたにし  
息か遠天の雲

葛飾や春田の畦をのりこゆる水にちからあり  
日の反射みゆ



伊良子崎の保美は俳士杜國の舊跡なり

伊良胡崎保美の小村の麥はまだ雲雀をかくす  
ほごともなき

身の科のおぼろ曇りにちる花のありてかなし  
き人の奥つき 潮音寺

芍薬

葉ごもりに隠れて一つ薄紅のはつかに葢をみ  
する芍薬

おもりかにさもたづたづと咲く花の芍薬かな  
し夜の灯火に

芍薬のやへに幾重に花びらのちぢれてあるが  
情にさやらふ

指やればさしも思ひにたへぬげの花よいぢら  
し芍やくの花

芍薬のあえかにしかもうす紅にうるほひあま  
る花に手をふる

手にとれば手にもたせくる感覚のおもたさゆ  
ゆし芍薬の花

うす紅のなかにひと花白妙の匂ひあまれる芍  
薬の花

汗かきて五月の畠の土の香に金の太息を吐く  
芥子の花

あやめ見に見に夏バラソルのひと並び苗間のうへの  
むらさきの空 葛飾三首

橋こえてひろびろと田の南風に女の聲のやや  
みだらなる

いづくにか一つゐて啼くよしきりにひる静か  
なる葛飾田圃

有賀春波翁杳々山莊逗留

わが山の春の霞をあへものに何はなくともゆるゆる  
いませ

栗田節子の結婚に

春蘭の花に照る日のくもりなき心をけふのは  
なむけにする

及能博士邸にて

白<sup>びやく</sup>王<sup>わう</sup>の牡丹の花の底ひより湧きあがりくる潮  
の音きこゆ

峯村國一林道夫二君山莊に夜泊す

とくおきてあさ寢の人をよびさます六月<sup>みなづき</sup>晴<sup>はれ</sup>の  
郭公の聲

かきつばた

植ゑて早や根づくか稻の青々と水口<sup>みなぐち</sup>すがし杜  
若さく

うゑて田のけさふく風にそよぎあふ苗のみど  
りの幼<sup>なみな</sup>さはよき

なよやかにうるみて風の南ふく五月眞菰の葛  
飾のさと

かきつばた水のみぎはに紫のひと花さくをあ  
はれがりゆく

さみだれの晴間の水のなみなみと蘭ぐさの丈  
もうづむばかりに

葛飾はあやめ田どころ水どころ葦あれば啼く  
よしきりの聲

葛飾はところいぶせき鄙曇り泥に田螺のひる  
を啼くさへ

あゆち瀉波間をいでてゆく月のふた國にかけ  
て照りぞわたらふ 伊奈森太郎君に

夏祭りみじか夜明くるしののめの雲に太鼓の  
まだ鳴りてゐる

夏祭り過ぎてしまへば心早や野山の秋を待つ  
ものにする

天地をゆりてとごろく潮の音のただここもと  
にひびくとぞおもふ 北海道潮音會

## 蓮

圓覺寺妙香池

山門の菟うのうへに空のいろの八月はちがつ涼し明け放  
れゆく

青杉の穂なみにふるる朝空のあざらけきかな  
波うつごとく

日のいづるひととき迅く杉の葉のむらさき匂  
ふ色をながしゆく

眼にみえて朝のひかりの走りしとおもふとき  
しも蓮ひらきたり

青杉のあさ荒<sup>あ</sup>らけく吐く息の眼にもみゆがに  
蓮ほのとさく

秋 精 進

あさ顔の濃き藍の花のひとつより流れて空の  
色となりぬらし

垣の秀<sup>は</sup>にはひあがりたるあさ顔のひと花のき  
ほひ精進となる

四方よりしたたるばかり流れ入る秋の大氣の  
なかにあへぎをり

木の間より廂あひより流れ入るこのあさの秋  
にただよはさるる

日ぐらしも啼かなくなれば秋いよよふかくな  
りゆくものとしらるる

山の家は雨三たびきてめつきりと身にそふほ  
ごの秋となりぬる

秋やけふ松の細葉のこまか葉のしみじみと日  
の衰へをしる

日の道の正午をすぎてかたむけばきのふのご  
とくかなかなの鳴く



くたびれて盆踊り子のかへりゆく夜明のみち  
の月見ぐさの花

秋となる沖の夜雲にいなづまのひらひら立ち  
て親を泣かしむ 幸野羊三の幼児計

かまくらに一度はきませ七年のおもひといは  
ば星も笑はむ 漆原ひさ子に

秋よ人ならば

穂にいつる去年のふる根のすすき生なまにありし  
ながらのこほろぎの鳴く

すすき山みゆるかぎりの銀の穂の眞うへにた  
かしひるすすきの富士

ちり一つとごめぬ空の清けさをわがものにし  
て月ぞ待たるる

日の入りてなほしばしなる夕映の天ぎる匂ひ  
星を生みくる

張りみちてしかもあえかにうるみもつ秋よ人  
ならばこひて死なまし

星よ知らむわれまだ若く野のみちに立ちてう  
たひし詩は何なりし

國ばらや草野のはてに河二つ月夜遠じろく流  
れるたりけり

孟宗のやぶの真うへに夕月の七日とおもふに  
ほはしき空

七日月露の草生に啼くむしの聲のまにまにひ  
かりそひゆく

さしいでて待つ夜のひとに面むかふさすがに  
月もうす霞みつつ

この月の有明となるころほひやはつかに菊の  
にほひ立ち來む

菊の葉に露あらくおくこのごろのあかつき起  
きはたのしみとなる

五日の風十日の雨のときにあひいねの穂なみ  
の盛りあがりみゆ 豊年頌

うづもれて稻の穂の上<sup>へ</sup>にありとだにはつかに  
村の屋根みえてゐる

## 天照る雪

霜ぐもり夜明け方より落葉焚くけぶりをあげ  
てゐる谷どころ

ひとところ尾花にのこる日を見せて入海のい  
ろ暗くなりきぬ

銀バスの光りきららに走りゆく野の霜枯のふ  
るさとの町 信濃を思ふ

ふるさとや西に穂高の山並の天照る雪をあさ  
も夕もみむ

紅葉狩梅幸死にて霜月の鬼女の妖面またもや  
は見む

ふみまししきみが歩みのあととめて玉をばひ  
ろへ言の葉の玉 讃玉砂集

かなしみに勝てよとぞおもふ天地に徹こほる祈り  
のちからみるべく 石原山城へ

氷解けて流るる水の音ぞする谷の鶯うち羽ぶ  
くらし 漆原久子結婚

藪もみぢ

折しもあれ膠ね木でとおもふもみぢ葉のひととこ  
ろ日をくづすがに散る

こぼれつつかつしづれつつ藪もみぢかすかに  
動く日さへみるべく

火のいろに燃えて膠木ねがきのこきもみぢおどろの  
谷をかぎろはしゐる

やぶ蔭に尺ばかりなる細こまか葉の何の木ならむ  
しみじみ染まれる

ふた並び山はむら濃こにもみぢしてあひだに青  
く海を透かしたり

この秋の郊外歌會は風邪にて行くを得ず  
ひとり籠居して詠みいでたる

わが髯の霜の荒さを武藏野のすすきのなかに  
おきて思はむ

むさし野のうけらが花にかけてせしねがひや  
われの年も古りにけり

霜晴るる尾花のうへにちちぶ嶺の新にひ若わか雪ゆきもこ  
のあさはみむ

青雲のよこたふうへにひと並び峰々晴るるあ  
ざらけき雪

いへばえに面つつましくいひいづる色あるも  
の言葉をといふらむ ある時

香村金北翁歌集「山路菊」に寄す

山菊の露をくすりに年さへや忘るるまでの老おきな  
をかさねませ

あさは濡れひるは干ひにつつ山菊の露にしさぶ  
る色のふかさを

小  
雪

東京よけさの小雪にさしきたる日は冬ながら  
うす茜して

雪すこし斑はたらにふりて明けそむる今朝の東京を  
とめぐに似る

しら雪のうづの眞玉を盛りあげてゆらめきい  
でてくる東京の顔

うづたかく雪つもりたる庇ひあはひのほのけき  
闇にゐるは何の神

こころ今ふかき林にゐるごとし枝々透かすあ  
げぼの雪



雪屋並ひとところ日の横雲にくれなる暗くき  
ざしつつあり

雪やみてひととき雲ゆあらはるるけさの太陽  
面しらけたり

昭和十二年

冬霞はたけのなかに枯草の山ある國ぞ相模の  
くには  
松のうへに風の音あり歩みゆくぬぎが岡の  
むらぎえの雪

土

ひとところ残れる雪に一天の空の青さのあつ  
まると思ふ

むらぎえの雪間の土のひとところ濡れいろだ  
ちて紫にみゆ

岡一つ日のなかにはしてしら雪のまだらの肌を  
霞にいろざる

黒土に淺々麥の色うごくきのふか雪のきえし  
とおもふに

遊ぶといふことの楽しさを知りてより日にけ  
に空しわれの心は

ゆきゆきて遊ぶこころの捕へたる一つのもの  
にまみれつつある

## 芽

雪とくる落葉の土に物の芽のはつかにうごく  
ころの朝闇

笑みて泣きてまだをとめ氣のひとかたに定ま  
りかぬるほどの春とも

かそかなる光りのなかに目ざめゆく物の息吹  
のきこゆるごとし

葦かびの世をこそおもへ天地の闇にはつかに  
光りさすとき

日のめぐる南のかたへ枯草のなだらかに海に寄  
り臥せる山